

世界に広がるコワーキング (coworking)、コリビング (coliving)

株式会社グッドバンカー
リサーチチーム

働き方改革が叫ばれるようになり、多くの企業では時間外労働の削減や生産性の向上を図る様々な施策が検討されています。またこれまでも、ワーク・ライフ・バランスの観点から在宅勤務制度の導入なども進められてきました。つまり、インターネット環境と必要な IT 機器さえ整っていれば、自宅でも外出先でもどこでも仕事ができるわけです。

このような状況を背景に、様々な場所で仕事をする新しい働き方をするノマドワーカーが増えています。このようなノマドワーカーは、世界でおよそ 118 万人に達し、彼らを対象にしたコワーキングスペースは世界に約 13,800 カ所あるという調査結果があります(*1)。

今回、弊社のアナリストがセルビアにある「モクリンハウス (Mokrin House)」というコワーキング、コリビングスペースに滞在してきました。ベオグラード空港から車で 2 時間半のモクリンという小さな町にあり、周りには特に何もありません。しかし、ここには世界各国から利用者が訪れています。滞在期間中は、カナダ人のソフトウェア開発者やアメリカ人の映像クリエイター数名のほか、ハンガリーの商社がグループ研修を行っていました。彼らに、なぜわざわざここに来て仕事をするのかと尋ねると、異口同音に「集中できる」「生産性が上がり効率的」「アイデアが浮かぶ」などという返事が返ってきました。

少なくとも一週間以上から数ヶ月にわたっての長期滞在が多い一方、毎日のように人の入れ替わりがあり、去る人には「次はどこへ行くの？」と決まって尋ねます。このように、世界中を転々と移動しながら仕事をしているのです。

同施設は、仕事ができる共有スペースのほか、宿泊施設、図書館、食堂が併設されており、施設内の菜園で収穫した野菜が食事に出されます。ワーキングスペースでは、パソコンを使ってウェブ会議をする人もいれば、中庭にソファを持ち出して屋外でパソコンで作業をしている人もいます。お互いに交流し、アイデアを交換したりもします。さらに、施設側が利用者を対象としたセミナーやビジネス講座を開催することもあります。

このようなコミュニティ性が、コワーキング、コリビングの特徴とも言えます。企業が独自に設置するサテライトオフィスやレンタルオフィスと違い、利用者間の交流が生まれ、そこから新たなアイデアが生まれたり、ビジネスに発展することもあり、それを目的に利用する個人や会社もあります。利用者は、起業家やフリーランサーのみにとどまらず、フルタイムの会社員も多いそうです。

日本でも、近年こうしたコワーキング施設が増えつつあり、郊外では移住者の招致を目的に運営する自治体もあります。もちろん、このような働き方が不向きな業種や業態、また時期的なものもあるでしょう。しかし、時間と場所にとらわれない良好な環境で、心豊かに効率的に働くことができるこのようなワークスタイルが、日本でどのように広がり、労働生産性を上げていくのか、興味深いところです。

(*1) ドイツ deskmag 社とベルギー SocialWorkplace 社によるオンライン調査結果